

霞ヶ浦でのチャネルキャットフィッシュの生息状況と全内漁連アンケートデータに基づく各地への拡散状況

○平山拓弥・遠藤友樹・山崎和哉・加納光樹（茨城大学広域水圏環境科学教育研究センター）

・内田和男（全国内水面漁業協同組合連合会）・小林光（水生生物保全協会）

チャネルキャットフィッシュ *Ictalurus punctatus* はアメリカナマズ科に属する北アメリカ原産の雑食性淡水魚で、日本の自然水域では 1982 年頃の江戸川での初確認以降に分布を拡大し、現在では福島県から滋賀県の複数の水域に定着している。とりわけ、霞ヶ浦（西浦，北浦，外浪逆浦などを含む水域）において本種は最も優占する外来魚種の一つであり、在来生物の食害や漁業被害が発生している。今後、霞ヶ浦を含む利根川水系以外の水域でも、本種の生息量が増加すれば同様な被害に発展するおそれがある。本報告では、霞ヶ浦で得られた情報を皆様と共有するため、まず、霞ヶ浦での野外調査で判明した本種の生態・生活史の最新知見を説明させていただく。次いで、全国内水面漁業協同組合連合会が実施した全国の組合員へのアンケートデータに基づいて、本種の各地への拡散状況についても報告する。

1. 霞ヶ浦での生態・生活史の最新知見

流入河川への侵入 本種は霞ヶ浦本湖の沖帯から沿岸帯の全域に生息しているが、流入河川での生息状況についてはわかっていなかった。本種の小河川への侵入状況を調べるため、雁通川と蔵川の中・下流域および河口付近の湖岸において夏季の夜間に置き針調査を実施した。その結果 125 個体（体長 21.0～60.5 cm）が採集され、両河川ともに河口から約 1 km の中流域（雁通川で垂直堰の下流側，蔵川では緩傾斜堰の上流側）まで侵入していた。緩傾斜堰を超えられる点は脅威である。本種の個体数密度と環境要因との関係を解析したところ、水深や泥分とは正の関係、流速とは負の関係が見出された。

年齢と成長および成熟 北浦で釣りや投網，トロール漁で採集したチャネルキャットフィッシュ計 937 個体（体長 3.8～60.5 cm）から摘出した耳石（礫石）の輪紋（年輪）を判読した。体長と年齢のデータに基づき作成した von Bertalanffy の成長式によると、採集個体の最高年齢は雄で 14 歳，雌で 13 歳であった。本調査地での成長は、原産国の多くの水域よりもやや早い傾向が認められた。採集個体の生殖腺の解析から、雌の最小成熟体長および年齢は、体長約 33 cm で 5 歳と推定され、雄も雌とほぼ同サイズ・同年齢で生殖腺体指数が急増する傾向が認められた。また、産卵盛期は 5～6 月であった。

稚魚の出現 霞ヶ浦において稚魚は主に 8 月にじゃかご製離岸堤付近の砂地に高密度で生息していた。

摂餌特性 北浦のヨシ帯周辺で餌釣りと投網で採集した 268 個体（体長 14.7～59.1 cm）の食性調査の結果、主要な餌は小型魚類（主にヌマチチブやモツゴ），甲殻類（主にテナガエビ），ハクレンなどの大型魚類の断片（肉片，鱗，骨など），陸上植物片，ユスリカ類であった。また、本種の捕食影響が在来魚種の成育場や餌場であるヨシ帯にも及んでいる可能性も示唆された。さらに、最新の研究では、本種が環境中の餌生物の変動に合わせて柔軟に食性を変化させることが明らかになっている。

2. 全内漁連アンケートデータに基づく各地への拡散状況

全内漁連のアンケートデータから、全国へと拡散していく危機的な様相が認められた。あくまでアンケートデータのため、これまで未生息であった地域のデータについては、今後、精査が必要である。現在の霞ヶ浦のように有効な防除ができないほどに個体数が増えてしまう前に、今後、全国各地の河川・湖沼での侵入防止対策及び早期発見・早期駆除が急務であると考えられる。